忘れられないあの光景が

見て聞いて…その後　No1

69年目の今年、あの日を又迎えようとしています。あの出来事は1日たりとも忘れさせてくれない、脳裡に焼きつき離れない、家族、友と引き裂かれ哀しく心の奥底までも被爆が染み入ります。

被爆したものしかわからない心の葛藤を静めるのは容易ではない。原爆の二文字がいやで、少しでも広島から離れたい気持が募り縁あって京都に住む事になり63年目です。でも言葉の弊害に悩み、広島出身に顔色を変えられる事等、いやな思いを消せると信じてましたが、消えるどころかよけいに倍増するばかりでした。

あの日、8月6日の朝はよく晴れた日でした。私は、町内単位での夏休み中の集団登校日で朝食を早くすませ自宅脇の路地で友達を待っていました。蝉がはげしく鳴きよけいに暑く感じる頃友達も集まり、誰が言うともなく登校時間にも早いし「暑いね」のひと言で川遊びに行く事を決め元安川へ。初めは、向こう岸に近い所の砂地で遊んでいたが引き潮から満潮と変わり川の水は少しづつ砂地を消すように水嵩が増して岸へとおいやられ服、下着が濡れるのをさけ石垣に置き又泳ぎに夢中でした。

8時15分、忘れる事の出来ない原子爆弾の投下でした。異様な気配に友と2人手をしっかり握り石段を駆け上がり、あと二段で道路上にと、その時、「ズズズ・ド・ドドン」と不気味な鈍い音とともに地響きが、瞬間無意識に伏せていたのです。しばらくして周りを伺うも何も見えずじっとしていました。視界を遮っていたのは、爆風による道路上の砂が舞い土煙が前方一帯を遮断していたのでした。静かに頭を上げ目に入ってきたものは真黒こげの人、人が横たわり、その傍では息たえだえの呻き声、唸り声、囁き、何が起こったのか、まさに地獄絵そのものです。あちらこちらからは、「水水を」「助けて」「熱い、熱い」又、人の名を呼ぶ声等々、「水が一」と石段からかけおり川へ、道路上からも川へ飛びこみ、川は見る間に人、人の流れにかわったのです。

その様子をただただ見入るばかり2人とも硬直したまま抱き合って言葉も出ず震えが止まらない状態が続き、他の友達への呼びかけすら出来ずキョロキョロとまわりを見ても姿はなく声も出ない程でした。

その内、私の名を呼ぶ声で我にかえり、「ワァー」と泣く事でしか表現が

出来ませんでした。祖母の声でほっとしたのです。怖い時間をどの位過したか今でも思い出せません。他の友達の事を伝えながら少しの間見ていました。見つかりません。

帰り道、がれきの上を裸足でごろごろと横たわる亡骸と人々が右往、左往と異様な姿や、服の原型もない皮膚は黒くただれ赤い身が露出し目を被う光景は、むごい、としかいえない状況でした。友とは別れ各家に向いました。

自宅にようやっと辿り着くも、裏庭の出入口しか家に入れず、庭も廃材等足の踏み場もない位、倒壊は免れたものの家の中は損壊を受けメチャメチャ状態、爆風の威力を見ました。

朝、皆んなで集った自宅前の路地も廃材や壁土でわが家の門部分が塞がれ、それは隣家が倒壊の被害を受けての事でした。玄関側も壁土が山盛りで出入りが出来ず、通りを挟み部屋も崩れる様に片付けている時、祖父が担架に乗せられ帰って参りました。学校の塀の下敷で内臓破裂の重体で言葉も発せず離れの部屋に、そうこうしている時急に空が暗くなり黒い大い雨が降りました。今まで見た事のない雨でした。雨が上がってしばらくすると北方面からの火事が南下危ないとの通報を受け自宅を離れる事に、祖父を担架に乗せて親戚の助けで元安川に架る穴だらけの南大橋を恐、恐、避難場所の吉島へ、道路に遺骸を敷き詰れば いっぱいの避難者、避難現場の光景も、語り尽くせない程です。そこも地獄絵図様なまでたどよめきがうづまいていました。火傷された若い女性の皮膚が、目の上から、身体からたれさがり服もわからない位ボロボロで、ありったけの力で「兵隊さん水、水を下さい。」と懇願されましたが水を飲むと死ぬよ。と言われて ガクッと言っていた身体がずれ折れ声としのばせて泣いておられた姿、納骨がいらっしゃらない様で1人で逝けずに残られたか、皆が殺気立ってだれひとり正常ではなかったかと――。

祖母にしがみつき離れず夜を迎えました。夜空いっぱいまっ赤に染まって火の勢いが増し、私たちの方に迫って来る様でした。いつの間にか私は寝てしまい、早朝、周囲のざわめきで目が覚め火はくすぶり鎮火したのでした。祖母が自宅の様子を見に出かけました。道路の反対側で火事はおさまり、家は無事だったと、

早速、避難場所を後にし、道路反対側の(千田町[redacted])焼跡のくすぶるなかをやっとの思いで帰り着く事が出来ました。朝食を裏の親戚の家で作ってもらい祖父の寝ている離れに運び、呼んでも返事がなく、体をゆすっても反応がなく祖母に知らせると祖父はすでに亡くなっていたのです。還らぬ人となった祖父の亡骸を茶毘にふすため近くの焼場へ、荒廃と化した町は目を覆うばかりの光景です。道端には数多くの人々がいまだ亡骸で横たわっています。なかでも、大八車を引いて立ったままの人、その荷台には足をかかえて座ったままの男の子、父子でしょうか真っ黒焦げの姿で、動物達も手を合わせながら通り過ぎる事しか出来ませんでした。

祖父が亡くなり悲、嘆にくれる間もなく白布につつまれた弟の遺骨を胸に母が帰って来ました。母と弟は、呉の海軍病院に父を見舞って広島駅に着き電車を待っている時に被爆、弟をおぶったままで駅舎までふっ飛び弟の泣き声で気づき駅舎の暗幕がかぶさっていました。2人とも火傷がひどく、とくに弟は、頭、身体に火傷、母は弟に助けられたと。

広島市内は全滅だと聞き又、父の居る病院に戻るしかないと輸送トラックに乗りましたが火傷の治療をと坂の国民学校で下り治療もかいなく弟は水を欲しがりながら亡くなったと。母も充分な治療も受けられず自己流で毎月をかけ治しました。肘部分の火傷はとくにひどくいつまでもじゅくじゅくと包帯交換はとくに苦痛の極みと嘆いていました。容赦なく包帯の上から大きな蛆がむらがり叩いてもはたいても次から次に飛んで来て傷口から又それも大きい蛆虫が這い出る始末終いには紋甲いかの甲羅を乾燥させ粉末を貼付し少しづつ快方に向ったが肘の火傷は骨が見えていましたし肉が盛り上がり大きいケロイドとしてのこりました。半袖が着られず或いは顔や手の甲のケロイドは少しづつ薄らいでゆきましたが原爆の火傷は中からうずかゆみもともないたへん苦しい日々を過したのでした。

祖父、祖母、父、母、叔父、兄、私、弟皆被爆者、今、1人となり思うことは戦争は絶対してはいけない、一般市民いや人間を末裔までも苦しめることになるから……

家族は8人でしたが親戚、縁者に至る人達が原爆を受けていた事は、すごいとしか言いようがありません。

祖父は、町内会長として、疎開された家屋解体作業の指揮に出かけ、自宅近くの高校のコンクリート塀が崩れ内臓破裂の重体で一声も発せずじまいで、あくる日に亡くなりました。

祖母は、朝食後の後片づけ家事にとりかかった所で、爆風に吹き飛ばされ気づいた時は、梁が斜めに落下、周囲の壁土もくずれ竹組みをのこすのみでした。梁の下敷にならずに助かったのでした。玄関からの出入りで壁土にうもれた板付きの2寸釘があるとはわからず思いっきり踏んでしまい、足の甲まで達する傷をおい、ばい菌が入り通院のはめに。祖母はがんで亡くなりました。

叔父(父の弟)は、勤労奉仕中、爆心地に近い小学校の2階で作業中、気づいたら2階の床が1階に落下、身体中にはガラスの破片が刺ったまんまの姿に素足だったので途中下駄と靴を拾い命辛々夢中で帰って来ました。何日か寝こんでいましたが、ガラスの破片を取りのぞく手術をし、全部は取れなくて我慢をしていました。近所に分家し自動車板金業を営んでます。叔父はやはりがんで亡くなってしまいました。

父は呉の病院で広島市内が爆弾で大変な事になっている状報を聞き病をおして帰宅。病も少しづつ快方に向かっていましたが、じっとしておれず修理の為天井裏に上がり修繕個所の点検中足をすべらし天井をつき破り風呂場へ落下、足首骨折、打撲で入院。その後も体のだるさを訴えていました。呉から帰っての入市でしたが、がんにおかされ亡くなりました。

母の事は、前述のとおりですが弟を目の前で亡くした事であまり語ろうとはしませんでしたが、私が体験を語っていると聞き、弟の絹のパンツ(うす茶色になってる血か、体液汁が染みて)と広島駅の暗幕を出して来てくれました。何度か語り部としてもち歩きましたが、どうしても涙が出てしまいつらい思いをしました。私がもっていてもいけないと思い被爆60年の時資料館へ預かっていただく事にしました。弟の写真と父の海軍時のリュックサックと共に寄贈。母もがんで亡くなりました。

兄は山県郡の田舎のお寺へ学童疎開、疎開先で原子雲を見たと早急に引き上げ帰って参りました。兄の同級生と日赤附近で遊んでいたとき病院横にまぶしいくらいまっ白い頭蓋骨や手足胴の各骨がたくさん積み上げられていたその光景は恐怖を感じながらも

恐恐見ていたと話してくれました。時が過ぎ平成2年春に母が亡くなりお通夜を済ませ緊張の糸がほぐれたのか兄が突然倒れ看病疲れ位に思っでました。告別式も滞りなく無事済ませて、後始末等精力的に動き何もなかった様でしたが、検査の結果はがんの告知でした。元気印の兄でしたが病には勝てず母が地獄で追っ掛けるがごとく1年後に亡くなりました。

弟と過した日々、8月6日を迎える前、配給に鍋をもって弟をおんぶし列に並んだり、家の中でかけっこして、勢いあまって廊下から庭へころがり庭石でかすり傷をさせて叱られた事を思い出します。この世で一ばん可愛い弟でした。遺品として、絹のパンツと写真があるだけです。広島市資料館に寄贈。

私は、火傷なしで膝にかすり傷だけでした。石段で伏せた事で熱線や爆風からも助かり今を生きでますが、友と逢いたいと言う気持がつのりました。昨年、広島市へたずねて少しづつわかり、友に逢えると胸がどきどきしましたが、ご主人様が電話に出て下さり、話しを聞くと3年前の東日本大震災(3・11)が起きた時の10分前に亡くなったと言われ愕然となりました。生きて逢えないと思うとどう対応したらいいのか今あぐんでいます。ご親族に便りをと思いながらなかなか出せずじまいです。

あの当時、結膜炎で目蓋があかず ホウ酸で消毒するも朝起きて洗面所にむかう時よく柱におでこをぶつけたり、鼻血も多く、祖母と競争するぐらいの量が出ていました。

69年目を迎えられる事の申し訳ける、多くの方々の犠牲のうえで生かされていますし、あの惨劇は、決して忘れてはいけない平和の尊さ、大切さを被爆体験者として語り継ぎたいと思います。

宇治市[redacted]

長谷部松子

26.5.26

（体験談）

No.1

昭20.8.6 AM8:15 あの朝、父と兄は飛行機が飛んで来るので
縁側へ出て空を見上げていたそうです
一瞬ピカッと光って爆弾が落ちました
母はすぐ私に毛布をかぶせたそうです。当然家は壊れ
その後江波のレンコン畑まで逃げ黒い雨が降り出したので
ハスの葉を傘代りにしたそうで 畑の農機具小屋で二泊し
吉島の自宅へ戻って見たが焼けていた為、吉島近くの川から
番船に乗り、父の実家の宇和木へ帰りましたが、父の兄に頼まれて
8/9 再び入市 放射能汚染等知る由もなく 女学校へ
行っていた父の姪2人を捜すため 母に背負われて県女と市女の
辺りを歩き回ったが 2人とも爆死。父と兄は日赤へ診察に行く
軽い"やけど"と傷で診てもらえず帰されたとか
吉島の隣に住んでいた生後8ヶ月の女児は亡くなりその母がなきがらを
背負って放心状態で歩いていたとも聞きました
その後母の実家の須川へ帰り、祖父宅の離れに疎開していた

No.2

阪大の医師に治療を受けるが 私は小さすぎて薬もめぐらしも
毒を出さないといけないことから 女の子なので傷付けるのもためらったが
頭の中なら髪の毛でかくせるということで 2、3ヶ所傷を付けたら
そこからどす黒い血のかたまりの様なものが沢山出たとか
母から それで私は助かったと聞かされました
その後も貧血等何もなかった人に比べて少し弱いですが
現在まで頑張っています

（直爆と入市被爆）

当時生後5ヶ月の私には当然分る筈もありませんが
母に聞きました。その後兄にも確認しました
小学校低学年の頃 飛行機が空を飛ぶ音を聞いて
両手で耳をふさいでしゃがみこんだ記憶があります

最後にこの様なむごい戦争が再び起きることのない様に
願っています

池田禎子

No1

人類史上初の原爆投下　（仙台）　早坂博

一九四五年八月六日未明の午前一時半（日本時間）南太平洋マリアナ諸島のテニアン米軍基地北飛行場から　B29爆撃機三機がつぎつぎに離陸した。　その一機エノラゲイは　リトルボーイ（ちびっこ）とあだな名された原子爆弾（ウラン爆弾）を搭載していた。三機は　暗い太平洋上を飛びつづけ、午前四時五分、硫黄島の上空で機首を日本に向けた。

この編隊より先に日本に飛来していた三機があった。天候観測機である。「豊後水道を敵大型機三機北上中」の情報に　中国軍管区司令部は午前七時十分　警戒警報を発令する。しかし　一機だけが広島上空を通過し　東中部を旋回して播磨灘方面へ去って行き　他の一機は小倉方面に　残りの一機も九州南部へ飛び去ったため　七時三十分に警戒警報は解除される。ほっとした広島市民は　ふだんの生活にもどった。ところが　広島上空を通過した一機は　いつは　広島上空　雲量全高度を通

No2

じて一〇分の三以下　第一目標　攻撃可能。第一目標である広島市は晴れていて　目視攻撃ができる　という意味である。

原爆機迫る。このころ　エノラゲイなどの三機編隊は　四国東上空から瀬戸内海にさしかかっている　左に旋回し　広島県東部の福山湾に向けコースをとる。その時刻が午前七時五〇分ころ。福山市松永町の監視哨が大型機（B29）三機が西進するのを見つけ　中国軍管区司令部に通報したのが八時六分。二分後

さらに一機が西進　と追加の報告もする。警報を発する司令部通信部に報告が入ったのが八時一一分。すでにエノラゲイは福山湾から内陸部に入り　三原市　西条町と西にすすみ　広島市に接近していた。

広島市民はだれ一人　こんな動きを露ほども感じていなかった。一人の母親は庭先で洗濯物を干している。そばの縁側では幼い女の子が人形遊びに夢中になっている。四人は軍需工場にお勤め途中で満員の路面電車に乗って

いる。南ぬほとんどの中学校、女学校の一年生は、建物疎開の作業に動員され、市の中心部の屋外で教師の指示を聞いていた。

時すでに遅し！八時一三分三〇秒、エノラゲイの爆撃手トムフィリビー少佐が照準器をのぞきこむ。さんさんとふりそそぐ朝日の下に広島の街はむきだしのまま、目標である市中心部の相生橋もはっきりと見える。迎え撃つ戦闘機一機も上がってこなければ、一発の高射砲弾も撃ちあげられてこなかった。

NHK広島放送局の番組がとつぜん中断されて、アナウンサーがあわただしく原稿を読みはじめる。「中国軍管区情報。敵大型機三機が西条上空を……」しかし、時すでに遅し！

米軍機は市民の頭上めがけて、人類初の原子爆弾を投下する。原子爆弾は、ねらった宝型の相生橋をわずかにはずれ、橋の南東広島市細工町二九―二（現在は広島市中区大手町一―一五―四）の島病院（現在は島外科）の上空五八〇メートルで大爆発を起こした。午前

八時一五分。大地を引き裂くような鋭い閃光と、耳をつんざく轟音とともに、かつて人間が体験したもっとも恐ろしいできなかった爆風と熱線と放射線が市民を襲い、都市そのものを壊滅させた。